

88 投稿

The Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) およびThe Child Adjustment and Parent Efficacy Scale (CAPES) の日本語版作成の試み

フジオカ ヒロシ タナカ ヨウコ ワキミズ リエ
藤岡 寛* 1 田中 陽子* 2 涌水 理恵* 3

目的 PAFAS/CAPESは、前向き子育てプログラム（トリプルP）の主要アウトカムである、子育てと家庭への適応、子どもの適応と親の効力感を包括的に測定できるツールである。PAFAS/CAPESの日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検証することを本研究の目的とした。

方法 保育園を利用している母親に、2015年7月から同年12月に、無記名自記式質問紙を配布し回答を得た。質問項目は、母親や家族の基本属性・育児効力感（PSE尺度）・育児負担感（育児負担感指標）・子どもの心理社会的問題（J-PSC17）・PAFAS/CAPES日本語版とした。PAFAS/CAPES日本語版作成にあたっては、原版からの翻訳および逆翻訳の過程を踏まえて、文意が明確に伝わる表記になるよう検討を重ねた。

結果 質問紙を1,443部配布し、682部を有効回答とした（有効回答率47.3%）。再テストについては、439部配布し、141部を有効回答とした（有効回答率32.1%）。PAFAS/CAPESの各ドメインのクロンバックの α は0.6-0.8程度で、全体を通じて、ある程度の内的信頼性が確認された。しかし、PAFASの子育ての一貫性ドメインのクロンバックの α は著しく低かった。PAFAS/CAPESの各ドメイン間の相関は、中等度もしくは軽度の相関がみられた（相関係数0.36-0.56）。他の一般的尺度との相関については、J-PSC17とCAPES（情緒および行動の問題ドメイン）との間で、中等度の相関がみられた。PSE尺度とCAPES（親の効力感ドメイン）との間で、軽度の相関がみられた。PAFASの因子分析では、原版と異なる8つの因子が抽出され、構成概念妥当性は部分的に確認されるにとどまった。PAFAS/CAPESの各ドメインにおける級内相関係数は0.7-0.8程度で、再テスト信頼性が確認された。

結論 上記の結果から、PAFAS/CAPESともに一定の信頼性・妥当性が確認された。トリプルPの介入効果を評価するのに適した尺度といえる。ただし、PAFASの子育ての一貫性ドメインにおいては、内的信頼性・構成概念妥当性・再テスト信頼性が低く、項目の再検討が必要である。

キーワード 前向き子育てプログラム（トリプルP）、育児、尺度、信頼性、妥当性

I 緒 言

子どもの虐待の報告件数は増加の一途をたどっている。そこには、育児の中心的役割を担う母親がパートナーから適切なサポートが得ら

れず、孤立し、育児に疲弊している背景がある¹⁾²⁾。母親が子どもの健やかな発達を促し、問題行動に適切に予防的に対処できるようになるために、前向き子育てプログラム（Positive Parenting Program：以下、トリプルP）によ

* 1 つくば国際大学医療保健学部教授 * 2 大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程大学院生

* 3 筑波大学医学医療系准教授

る介入が行われている³⁾⁴⁾。トリプルPはオーストラリアで社会学習理論を基盤にした行動的家族相互作用プログラムとして開発され、世界25カ国以上で実施されている。子どもの発達や気になる行動等様々な問題について、親がどのように捉え、どのような関わりをもつと子どもの問題が改善されるのか、子どもの発達が上手に促されるのか等、具体的なスキルや考え方を親が学んでいく。その結果、親自身が子育てに関するスキル・知識・自信を獲得することによって、あらゆるレベルの子どもの情緒的問題や行動的問題を予防し、軽減させることができる⁵⁾⁶⁾。The Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) とThe Child Adjustment and Parent Efficacy Scale (CAPES) は、トリプルPの主要アウトカムである、子育てと家庭への適応、子どもの適応と親の効力感を包括的に測定できるツールである。いずれも原版はオーストラリアで開発され、高い信頼性と妥当性が認められている⁷⁾⁸⁾。今後、わが国においてもトリプルPの効果測定を可能とするべく、PAFASおよびCAPESの日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検証することを本研究の目的とした。

Ⅱ 方 法

(1) 対象

関東圏と関西圏で保育園を利用している母親のうち、2歳児以上の子どもをもつ母親を対象とした。

(2) PAFAS/CAPES日本語版の作成

原版の内容と英語・日本語に精通した1名および研究者2名が、協議を重ねて、英語から日本語に翻訳した(順翻訳)。英語圏での生活経験があり、かつ本研究やトリプルPに携わっていない別の1名が、その日本語訳を英語に翻訳した(逆翻訳)。逆翻訳による表記と原版の表記を比較して、原版の意味が誤解されていたり、曖昧になっていたりする箇所を修正し、日本語版とした(表1)。

(3) 質問紙配布・回収手順

関東圏と関西圏の複数の保育園に対して、あらかじめ本研究の趣旨を説明し、内諾を得た。子どもの送迎の際に、担任の保育士から母親に対して、口頭と文書で本研究の趣旨を説明し、無記名自記式質問紙を手渡した。対象である母親には、回答済みの質問紙を外封筒に密封の上、保育園に提出してもらった。後日、研究者が回答済みの質問紙を回収した。なお、一部の母親には、約4週間後に、同一の質問紙に再度回答してもらった(再テスト)。質問紙の配布・回収期間は2015年7月から同年12月であった。

(4) 質問紙

母親に配布した質問紙は、以下の内容で構成されている。

1) 基本属性

母親の年齢、就労状況、学歴、家族構成、子どもの人数、子育ての相談ができる相手の有無等。

2) 育児効力感

育児に対する自己効力感尺度(PSE尺度)⁹⁾を使用した。5件法、13項目で構成されている。本研究におけるクロンバックの α は、0.84であった。

3) 育児負担感

中嶋らによる育児負担感指標¹⁰⁾を使用した。5件法であり、社会的活動制限の認知4項目と否定的感情4項目の計8項目で構成されている。本研究におけるクロンバックの α は、0.89であった。

4) 子どもの心理社会的問題

Pediatric Symptom Checklist日本語短縮版(J-PSC17)¹¹⁾を使用した。3件法、17項目で構成されている。本研究におけるクロンバックの α は、0.82であった。

5) The Parenting and Family Adjustment Scale (PAFAS) 日本語版

子育てに関する18項目と家庭への適応に関する12項目の計30項目で構成されている。子育てに関しては、子育ての一貫性・強制的なしつけ・前向きな励まし・親子関係の4つの下位ド

表1 PAFAS/CAPES日本語版

	項目
P A F A S 子 育 て	子育ての一貫性 子どもが言われたことをしない時には、根負けして自分でする 子どもが好ましくない行動をとっている時に、その結果となるものを使って対処する（例：おもちゃを取り上げるなど）※ 子どもが好ましくない行動をとっている時、何かが起こると脅す（例：テレビを消すなど）が、それを実行しない 子どもが好ましくない行動には、いつも同じように対処する※ 子どもが怒ったりパニックをおこしたりした時には、子どもが欲しいものを与える
	強制的なしつけ 子どもが好ましくない行動をとっている時、子どもに怒鳴ったり怒ったりする 子どもが好ましくない行動に対して、教訓となるように子どもにいやな思い（例：罪悪感や恥）を感じさせようとする 子どもが好ましくない行動をとっている時は、子どもをたたく 子どもの行動や態度について子どもと言い争う 子どもにイライラする
	前向きな励まし 子どもが好ましい行動をした時には、おやつ、ほうび、または楽しい活動を子どもに与える※ 子どもが好ましい行動をしている時には子どもをほめる※ 子どもが好ましい行動をとっている時、子どもに注目する（例：抱く、ウィンクする、ほほえむ、キスをするなど）※
	親子関係 子どもと話す※ 子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい※ 子どもを誇りに思う※ 子どもと一緒に過ごすのは楽しい※ 子どもとはよい関係だ※
	親としての適応 ストレスを感じる、または心配だ 幸せだと感じる※ 悲しい、または落ち込んでいると感じる 自分の人生に満足している※ 子どもが感情的になった時、もしくは親自身が落ち込んでいたりストレスを感じたりしている時、親として一貫した対応ができる※
	家族関係 私の家族はお互いに助け合う、または支えあう※ 私の家族はお互いに仲が良い※ 私の家族はケンカする、または言い争う 私の家族はお互いを批判する、またはお互いをみくだす
	親のチームワーク 子育てでは、私はパートナーとチームとなって動く※ 子育てについてパートナーと意見が食い違う パートナーとはよい関係だ※
	情緒の問題 心配する 恐れて怖がっているように見える 幸せそうに見えない、または悲しそうに見える
	行動の問題 自分の思い通りにならないとパニックをおこしたり怒ったりする 家の中の仕事をしよう頼まれた時に断る かんしゃくを起こす 食事の時間に好ましくない行動をとる 他の子ども、兄弟姉妹と言い争いまたはけんかをする 作ってもらった食べ物を食べるのを拒む 服を着るのに時間がかかりすぎる 私、または他人を傷つける（例：たたく、押す、引っかく、かみつくなど） 私が他の人と話している時にじゃまをする 大人の注目を受けずに何かをしていることが難しい 怒鳴る、叫ぶ、または悲鳴をあげる ぐずったり不平を言ったりする（泣き言をいう） 何かするように頼まれると反抗的な行動をとる 同い年の他の子どもよりよく泣く 私に失礼な返答をする しなければいけない事や活動の予定を立てるのが難しい 大人から常に注目されなくても何かしてられる※ 寝るときは協力的だ※ 年齢に適切なことが一人でできる※ 決まりや制限に従う※ 家族と仲良くする※ 親切で他の人の助けになる※ 自分の見方、アイデア、ニーズを適切に話す※ 大人にするように言われたことをする※
	C A P E S

注 ※逆転項目、下線：CAPES親の効力感の項目としても扱う

メインで構成されている。家庭への適応に関しては、親としての適応・家族関係・親のチームワークの3つの下位ドメインで構成されている。各項目とも4件法であり、スコアが高いほど、問題があることを示す。

6) The Child Adjustment and Parent Efficacy Scale (CAPES) 日本語版

子どもの情緒および行動の問題に関しては4件法、27項目で構成されている。そのうち情緒の問題に関するドメインが3項目、行動の問題に関するドメインが残りの24項目である。スコアが高いほど、問題が深刻であることを示す。

親の効力感については、上述の27項目のうち19項目について、その自信度を10段階で問うている。スコアが高いほど、親の効力感が高いことを示す。

(5) 分析

得られたデータについて、各変数の記述統計を算出した。尺度については、信頼性を確認するために、それぞれクロンバックの α を算出した。尺度間の関連をみるために、尺度間の相関係数を算出した。PAFAS/CAPESについては、再テストのデータを用いて、級内相関係数を算出した。PAFASについては因子分析を行った。データ解析においては、IBM SPSS Ver23を用いた。

表2 対象者の背景 (n=682)

	平均値±標準偏差	最小値-最大値
地域		
茨城	208(30.5)	
関西	474(69.5)	
子どもの人数 (n=664)	2.0± 0.8	1- 5
母親年齢 (n=664) (歳)	35.0± 4.8	19- 53
就労		
無職	128(18.8)	
常勤またはパート	529(77.6)	
学生	5(0.7)	
その他	3(0.4)	
無回答	17(2.5)	
家族形態		
核家族	554(81.2)	
拡大家族	77(11.3)	
母子家庭	34(5.0)	
無回答	17(2.5)	
最終学歴		
中学校	25(3.7)	
高校	185(27.1)	
短大	126(18.5)	
専門学校	134(19.6)	
大学	176(25.8)	
大学院	17(2.5)	
その他	2(0.3)	
無回答	17(2.5)	
相談相手の有無		
有	641(94.0)	
無	24(3.5)	
無回答	17(2.5)	
育児効力感 (範囲: 13-65点) (n=649)	49.6± 7.6	22- 65
育児負担感 (範囲: 8-40点) (n=678)	18.0± 6.6	8- 40
子どもの心理社会的問題 (範囲: 0-34点) (n=670)	8.6± 4.8	0- 24
PAFAS (点)		
子育て	17.1± 5.2	7- 36
子育ての一貫性	6.1± 1.7	1- 13
強制的なしつけ	5.7± 2.7	0- 15
前向きな励まし	2.8± 1.8	0- 9
親子関係	2.6± 2.7	0- 15
家庭への適応	11.9± 6.1	0- 35
親としての適応	5.3± 2.6	0- 15
家族関係	3.5± 2.4	0- 12
親のチームワーク	3.1± 2.2	0- 9
CAPES (点)		
情緒および行動の問題	24.6±10.1	0- 60
情緒の問題	1.4± 1.3	0- 7
行動の問題	23.2± 9.5	0- 57
親の効力感 (n=574)	128.7±35.1	19-190

(6) 倫理的配慮

対象者と対象施設に対して、口頭および文書にて本研究の趣旨を説明した。研究協力(質問紙の回答)に際して、協力は自由意思によること・協力しなくとも子どもの保育等に影響はないこと・回答途中でやめてもよいこと・個人情報保護されることを約束し、遵守した。

なお、本研究の実施にあたっては、あらかじめ研究者の所属機関の倫理委員会にて承認を得た(つくば国際大学倫理委員会第27-4号、大阪府立大学看護学研究倫理委員会第27-22号、筑波大学医の倫理委員会第992号)。

III 結果

(1) 質問紙配布・回収状況

質問紙を1,443部配布し、767部回収した。そのうち、PAFASおよびCAPES(情緒および行動の問題)の項目に欠損のあるケースを除外し、682部を有効回答とした(有効回答率47.3%)。

再テストについては、439部配布し、259部回収した。そのうち、PAFASお

よびCAPES（情緒および行動の問題）の項目に欠損のあるケースを除外し、141部を有効回答とした（有効回答率32.1%）。

(2) 対象者の背景（表2）

対象者が養育している子どもの人数は1人から5人、平均2.0人であった。対象者の年齢は19歳から53歳、平均35.0歳であった。対象者のうち就労（パートを含む）をしているケースが8割近く占めた。家族構成は核家族が大半を占めているが（81.2%）、母子家庭のケースも含まれていた（5.0%）。ほとんどすべての対象者が、育児に関して相談できる相手がいると回答していた（94.0%）。

(3) 内容妥当性

日本語版作成にあたっては、原版の翻訳および逆翻訳の過程において、文意が明確に伝わる表記になるよう検討を重ねた。

項目分析では、PAFASの1項目「子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい」およびCAPESの3項目「恐れて怖がっている

ように見える」「大人の注目を受けずに何かをしていることが難しい」「幸せそうに見えない、または悲しそうに見える」において、対象者の7割以上が全くあてはまらないと回答していた。

質問紙の自由記述欄において、PAFASのいくつかの項目で取り上げられている「好ましい／好ましくない行動」の表記の意味がわかりにくいと記載した回答者がいた（1人）。また、CAPESの親の効力感（自信度）の評価が10段階で細かく、答えるのが難しいと記載した回答者が数人いた。PAFASおよびCAPES（情緒および行動の問題）項目について全く欠損がなかったケースにおいても、CAPES（親の効力感）の回答に欠損がみられたケースが散見された（15.8%）。

(4) 内的信頼性（表3）

PAFASの子育てドメインおよび家庭への適応ドメインのクロンバックの α は0.67, 0.84であった。CAPESの情緒および行動の問題ドメインと親の効力感ドメインのクロンバックの α は0.87, 0.96であった。その他、下位ドメインについては、0.6-0.8程度で、全体を通じて、ある程度の内的信頼性が確認された。しかし、PAFASの子育ての一貫性ドメインおよびCAPESの情緒の問題ドメインのクロンバックの α は0.07, 0.43であり、特にPAFASの子育ての一貫性ドメインのクロンバックの α が著しく低かった。

(5) 収束妥当性および併存妥当性（表4）

PAFAS/CAPESの各ドメイン間の相関は、中等度もしくは軽度の相関がみられた（相関係

表3 内的信頼性（n=682）

	クロンバックの α	項目数
PAFAS		
子育て	0.67	18
子育ての一貫性	0.07	5
強制的なしつけ	0.72	5
前向きな励まし	0.61	3
親子関係	0.84	5
家庭への適応	0.84	12
親としての適応	0.67	5
家族関係	0.71	4
親のチームワーク	0.69	3
CAPES		
情緒および行動の問題	0.87	27
情緒の問題	0.43	3
行動の問題	0.86	24
親の効力感	0.96	19

表4 収束妥当性（他ドメインとの関連）・併存妥当性（他の尺度との関連）

	育児効力感：PSE尺度	育児負担感：育児負担感指標	子どもの心理社会的問題：J-PSC17	PAFAS（子育て）	PAFAS（家庭への適応）	CAPES（情緒および行動の問題）	CAPES（親の効力感）
育児効力感：PSE尺度	1.00						
育児負担感：育児負担感指標	-0.42**	1.00					
子どもの心理社会的問題：J-PSC17	-0.33**	0.44**	1.00				
PAFAS（子育て）	-0.49**	0.51**	0.35**	1.00			
PAFAS（家庭への適応）	-0.50**	0.51**	0.41**	0.58**	1.00		
CAPES（情緒および行動の問題）	-0.36**	0.49**	0.60**	0.44**	0.46**	1.00	
CAPES（親の効力感）	0.36**	-0.31**	-0.30**	-0.35**	-0.36**	-0.45**	1.00

注 **p < 0.01, Spearmanの順位相関係数

表5 PAFAS日本語版の因子分析

＜所属ドメイン＞ 項目	因子							
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
＜親子関係＞								
子どもと一緒に過ごすのは楽しい	0.85	-0.06	0.04	0.05	-0.06	-0.03	0.06	0.00
子どもとはよい関係だ	0.82	-0.03	-0.04	0.09	0.04	-0.05	-0.03	0.04
子どもを誇りに思う	0.74	-0.07	0.06	0.02	-0.02	0.06	-0.06	-0.02
＜親としての適応＞								
幸せだと感じる	0.67	0.15	-0.01	0.05	-0.01	-0.09	-0.04	-0.01
＜親子関係＞								
子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい	0.61	0.02	0.10	-0.17	0.04	0.17	-0.09	0.00
子どもと話す	0.57	-0.01	0.00	-0.21	0.05	0.10	0.16	-0.04
＜親としての適応＞								
子どもが感情的になった時、もしくは親自身が落ち込んでいたりストレスを感じたりしている時、親として一貫した対応ができる	0.22	0.08	-0.20	0.12	0.05	-0.02	0.14	0.17
＜家族関係＞								
私の家族はお互いに仲が良い	0.04	0.88	0.05	-0.07	0.00	0.01	0.01	0.01
私の家族はお互いに助け合う、または支えあう	0.04	0.86	0.06	-0.02	-0.11	0.01	0.01	-0.03
＜親のチームワーク＞								
パートナーとはよい関係だ	-0.04	0.79	-0.04	-0.03	0.11	-0.04	-0.03	-0.01
子育てでは、私はパートナーとチームとなって動く	-0.08	0.75	0.02	0.01	-0.06	0.07	0.00	0.04
＜親としての適応＞								
自分の人生に満足している	0.27	0.37	-0.18	0.18	-0.02	-0.03	-0.02	0.09
＜子育ての一貫性＞								
子どもが好ましくない行動をとっている時に、その結果となるものを使って対処する（例：おもちゃを取り上げるなど）	-0.13	0.03	-0.58	0.02	0.05	0.07	0.01	-0.04
＜強制的なしつけ＞								
子どもの好ましくない行動に対して、教訓となるように子どもにいやな思（例：罪悪感や恥）を感じさせようとする	-0.03	0.10	0.52	0.06	-0.02	-0.02	0.02	-0.01
子どもが好ましくない行動をとっている時は、子どもをたたく	0.03	0.01	0.43	0.12	0.01	0.08	0.00	0.14
子どもの行動や態度について子どもと言い争う	0.02	-0.05	0.35	0.14	0.16	0.00	-0.01	0.11
子どもにイライラする	-0.04	-0.06	0.11	0.76	-0.03	0.06	0.02	0.06
＜親としての適応＞								
ストレスを感じる、または心配だ	-0.04	-0.01	0.07	0.75	-0.01	0.05	-0.02	-0.02
悲しい、または落ち込んでいると感じる	0.11	0.11	0.13	0.47	0.01	-0.01	0.04	-0.15
＜子育ての一貫性＞								
子どもの好ましくない行動には、いつも同じように対処する	0.09	0.09	-0.11	-0.17	-0.02	0.07	0.02	0.02
＜家族関係＞								
私の家族はケンカする、または言い争う	0.05	-0.15	-0.01	-0.02	0.83	-0.01	-0.03	-0.01
私の家族はお互いを批判する、またはお互いをみくだす	-0.02	0.21	0.06	-0.09	0.60	0.03	0.04	0.04
＜親のチームワーク＞								
子育てについてパートナーと意見が食い違う	-0.08	0.20	-0.01	0.21	0.38	-0.03	0.00	-0.10
＜前向きな励まし＞								
子どもが好ましい行動をとっている時、子どもに注目する（例：抱く、ウィンクする、ほほえむ、キスをするなど）	0.10	0.03	0.07	0.00	0.01	0.75	0.01	-0.02
子どもが好ましい行動をしている時には子どもをほめる	0.05	0.01	0.02	0.11	-0.01	0.58	-0.04	-0.10
子どもが好ましい行動をした時には、おやつ、ほうび、または楽しい活動を子どもに与える	-0.01	-0.01	-0.33	0.04	-0.01	0.39	-0.04	0.18
＜子育ての一貫性＞								
子どもが怒ったりパニックをおこしたりした時には、子どもが欲しいものを与える	-0.01	-0.05	0.07	-0.05	-0.02	0.03	0.69	-0.02
子どもが言われたことをしない時には、根負けして自分でする	0.04	0.02	-0.06	0.09	0.00	-0.12	0.42	0.01
子どもが好ましくない行動をとっている時、何かが起こると脅す（例：テレビを消すなど）が、それを実行しない	-0.11	0.01	0.15	0.10	0.00	0.10	0.17	0.14
＜強制的なしつけ＞								
子どもが好ましくない行動をとっている時、子どもに怒鳴ったり怒ったりする	-0.02	0.01	0.35	-0.05	-0.01	-0.07	-0.03	0.83
因子寄与	5.06	4.87	2.32	3.61	2.60	2.38	1.16	1.71
因子間相関								
I	1.00							
II	0.55	1.00						
III	0.11	0.09	1.00					
IV	0.37	0.43	0.37	1.00				
V	0.15	0.43	0.35	0.43	1.00			
VI	0.48	0.28	-0.09	-0.05	-0.04	1.00		
VII	0.08	0.12	0.24	0.28	0.21	-0.05	1.00	
VIII	0.14	0.11	0.30	0.43	0.20	-0.07	0.09	1.00

注 最尤法による因子抽出、プロマックス回転

数0.36-0.56)。他の一般的尺度との相関については、子どもの心理社会的問題を扱うPediatric Symptom Checklist日本語短縮版（J-PSC17）とCAPES（情緒および行動の問題ドメイン）との間で、中等度の相関がみられた（相関係数0.60）。育児に対する自己効力感尺度（PSE尺度）とCAPES（親の効力感ドメイン）との間で、軽度の相関がみられた（相関係数0.36）。育児負担感指標とPAFAS（子育てドメイン）およびPAFAS（家庭への適応ドメイン）との間で、中等度の相関がみられた（相関係数0.51）。

表6 再テスト信頼性（n=141）

	級内相関係数
PAFAS	
子育て	0.72
子育ての一貫性	0.36
強制的なしつけ	0.67
前向きな励まし	0.44
親子関係	0.72
家庭への適応	0.79
親としての適応	0.77
家族関係	0.76
親のチームワーク	0.76
CAPES	
情緒および行動の問題	0.73
情緒の問題	0.41
行動の問題	0.74
親の効力感（n=113）	0.80

（6）構成概念妥当性（PAFASのみ）（表5）

PAFASは複数の下位ドメインから構成されているため、その因子構造を明らかにするべく、因子分析を行った。最尤法、プロマックス回転による因子抽出を行った。その結果、原版とは異なる8つの因子が抽出された。前向きな励ましドメインと親子関係ドメインはそれぞれ単一の因子として抽出された（第I因子、第VI因子）。家族関係ドメインと親のチームワークドメインは項目同士の入れ替えがあったものの2つの因子に集約された（第II因子、第V因子）。残りの3つのドメイン（子育ての一貫性・強制的なしつけ・親としての適応）は異なる3因子に分かれていて、ドメインとしての収束は確認できなかった。

（7）再テスト信頼性（表6）

PAFAS/CAPESの各ドメインにおける級内相関係数は0.7-0.8程度で、再テスト信頼性が確認された。しかし、PAFASの下位ドメインである、子育ての一貫性ドメイン（5項目）では級内相関係数が0.36であった。また、同じくPAFASの下位ドメインである、前向きな励ましドメイン（3項目）では0.44、CAPESの情緒の問題ドメイン（3項目）では0.41であり、いずれも低値であった。

Ⅳ 考 察

本研究の結果から、PAFAS/CAPES日本語

版について一定の信頼性・妥当性が確認された。以下に、PAFAS/CAPES日本語版の特徴と課題を考察する。

（1）内容妥当性

PAFASの1項目「子どもを抱きしめたり、キスをしたりするのは楽しい」に関して、身体的な愛情表現（抱きしめる、キスをする）を行わないのは、日本人の特性を示しているのかもしれない¹²⁾。しかし、身体的な愛情表現は子どもの発達を促す重要な子育てスキルであり¹²⁾¹³⁾、トリプルPの介入効果を測定するために必要な項目と考えられる。CAPESの3項目「恐れて怖がっているように見える」「大人の注目を受けずに何かをしていることが難しい」「幸せそうに見えない、または悲しそうに見える」については、本研究の対象者は保育園を利用している健常児をもつ母親であったため、反応がなかったのかもしれない。早急に子育て介入を必要とする深刻なケースにおいては、必要な項目と考えられる。

PAFAS/CAPESは、トリプルPの教授内容に基づいて作られており、プログラムの介入効果の評価に適していると考えられる。しかし、今回の対象者は保育園を利用している一般の母親であったため、いくつかの質問項目の意図が伝わりにくかったと考えられる。今後、一般の母親を対象に実施するためには、質問紙の項目や構成の再検討が必要かもしれない。

(2) PAFASの子育ての一貫性ドメイン

PAFASの子育ての一貫性ドメインは、原版の因子分析ではドメインとして認められていたものの⁷⁾、スペイン語版では認められなかった¹⁴⁾。わが国の先行研究においても、本研究同様に内的信頼性が認められなかった¹⁵⁾。子育ての一貫性ドメインの5つの項目は、トリプルPで教授される「一貫した態度」を反映させることを意図したものであるが、具体的には子どもの問題行動に対する親の対処方法を尋ねている。本研究の対象者（トリプルP未受講者）においては、子どもの問題行動に対する対処方法はまさに様々であるため、「一貫した態度」という一つのドメインとして測定することに限界があったのかもしれない。

(3) 収束妥当性および併存妥当性

PAFAS/CAPESの各ドメインは、ドメイン独自の説明範囲を持ちつつも、全体への収束妥当性が確認された。育児効力感や児の問題行動については、CAPESの各ドメインがそれぞれ対応しており、併存妥当性が確認された。PAFASでは親の子どもに対する育児スタイルや家族内の関係性を尋ねているが、その関連要因として育児負担感が存在することが示唆された。これは育児負担の要因として夫婦関係や家族機能を挙げた先行研究の結果とも合致する¹⁶⁾¹⁷⁾。

(4) 再テスト信頼性

級内相関係数が低かった3ドメインについては、項目数の少なさが一因として考えられる。また、再テストを行うまでの4週間の間に、子育ての状況に併せて親の対処方法も刻々と変化していた可能性がある。わが国の先行研究では、介入を行っていない対照群において、子どもと親の状況に変化があった¹⁵⁾。今後、再テストの間隔について検討を要する。

性が確認された。トリプルPの介入効果を評価するのに適した尺度といえる。一方で、トリプルPを知らない回答者にとっては質問の意図を把握することが難しい項目もあった。PAFASの子育ての一貫性ドメインについては、項目の再検討を要する。

謝辞

本研究にご協力いただいた対象者の皆様に、心より御礼申し上げます。本研究で使用したPAFAS/CAPESの日本語訳および逆翻訳にあたり、Dr. Ania Filus (Center for Self-Report Science, University of Southern California) からのご協力に感謝いたします。本研究は、公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団2015年度研究助成を受けて行われた。

文 献

- 1) Fujiwara T. Population strategy to address child maltreatment in Japan. *Public Health* 2007 ; 121 : 485-6.
- 2) 梅田直美. 「育児の孤立化」問題の形成過程：1990年以降を中心に. *現代の社会病理* 2008 ; 23 : 109-24.
- 3) Turner KM, Richards M, Sanders MR. Randomized clinical trial of a group parent education programme for Australian indigenous families. *Journal of Paediatrics and Child Health* 2007 ; 43 : 429-37.
- 4) Fujiwara T, Kato N, Sanders MR. Effectiveness of Group Positive Parenting Program (Triple P) in changing child behavior, parenting style, and parental adjustment : An intervention study in Japan. *Journal of Child and Family Studies* 2011 ; 20 : 804-14.
- 5) Sanders MR. Triple P-positive parenting program : Towards an empirically validated multi-level parenting and family support strategy for the prevention of behavior and emotional problems in children. *Clinical Child and Family Psychology Review* 1999 ; 2 : 71-90.
- 6) Sanders MR. Development, evaluation, and multi-

V 結 語

PAFAS/CAPESともに一定の信頼性・妥当

- national dissemination of the triple P-Positive Parenting Program. *Annual Review of Clinical Psychology* 2012 ; 8 : 345-79.
- 7) Sanders MR, Morawska A, Haslam DM, et al. Parenting and Family Adjustment Scales (PAFAS) : Validation of a Brief Parent-Report Measure for Use in Assessment of Parenting Skills and Family Relationships. *Child Psychiatry and Human Development* 2014 ; 45 : 255-72.
- 8) Morawska A, Sanders MR, Haslam D, et al. Child Adjustment and Parent Efficacy Scale (CAPES) : Development and Initial Validation of a Parent Report Measure. *Australian Psychologist* 2014 ; 49 : 241-52.
- 9) 金岡緑. 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale : PSE尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. *小児保健研究* 2011 ; 70 : 27-38.
- 10) 中嶋和夫, 斎藤友介, 岡田節子. 母親の育児負担感に関する尺度化. *厚生指標* 1999 ; 46 : 11-8.
- 11) 平谷優子, 法橋尚宏, 石崎優子. PSC (Pediatric Symptom Checklist) 日本語短縮版 (J-PSC17) の開発とその有効性の検討. *小児保健研究* 2014 ; 73 : 776-82.
- 12) Montagu A. *Touching : The Human Significance of the Skin*. New York : Columbia University Press, 1971.
- 13) 加藤則子, 柳川敏彦. トリプルP前向き子育て17の技術 : 「ちょっと気になる」から「軽度発達障害」まで. 東京 : 診断と治療社, 2010.
- 14) Mejia A, Filus A, Calam R, et al. Measuring parenting practices and family functioning with brief and simple instruments : Validation of the Spanish version of the PAFAS. *Child Psychiatry & Human Development* 2015 ; 46 : 426-37.
- 15) Wakimizu R, Fujioka H. Strengthening positive parenting through two-month intervention of a local city in Japan : evaluating parental efficacy, family adjustment, and family empowerment. *European Journal for Person Centered Healthcare* 2015 ; 3 : 503-12.
- 16) 小島藍, 九十可奈子, 酒井美幸, 他. 父親の育児に対する意識と行動が家族機能および母親の育児負担感に及ぼす影響. *小児保健いしかわ* 2010 ; 22 : 14-22.
- 17) 森永裕美子, 難波峰子, 二宮一枝. 育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究. *小児保健研究* 2015 ; 74 : 519-26.